存在と言葉の相即

——ハイデガーの思惟を手掛かりにして——

山　本　與志隆

序　　論

ハイデガーが『存在と時間』以来，あるいはそれ以前から既に存在の問いと共に言葉の問題をその思惟の事柄としていたことは周知の事実である。「言葉は存在の家である（Die Sprache ist das Haus des Seins.）」（WM S. 311）という有名な命題は，ハイデガーによって思惟された存在と言葉という二つの事柄が，その根底において相互に連関し合っていることを示唆している。では，この命題をどのように解釈すれば，その意味するところを正しく理解し，存在と言葉との連関を解明することができるのであろうか。もちろん我々は古代ギリシアのパルメニデスの言葉を思い浮べることもできるし，また西洋形而上学に伝統的な真理概念である思惟と事物との一致ということとの関係を究明することもできる。しかし，果たして真なる意味において存在と言葉とは相即する（zusammengehören）(1) ということができるのであろうか。こうした問いに対して，以下の考察においては次の三つの節に分けて考察を進め，ハイデガーの主張する存在と言葉の相即という事態の解釈を試みたい。

Ⅰ．『存在と時間』におけるロゴスの概念

Ⅱ．中期ハイデガーの真理概念

Ⅲ．存在と言葉——比喩としての言葉の構造——

特に，Ⅱにおいて考察されるように，存在と言葉を結びつける結節点となるのは，やはりハイデガーにとっての根本問題である真理（Wahrheit）の問題である。この点を念頭に置きながら，考察に入っていこう。

I.『存在と時間』におけるロゴスの概念

周知の如くハイデガーは『存在と時間』(1927) の第7節において，自らの「存在の問い」を遂行する際の「方法概念」としての「現象学 (Phänomenologie)」に関して，その本来的意味の分析を行なっている。そこでは，語源的にそのギリシア語の起源である „φαινόμενον“ と „λόγος“ にまで遡って現象学の意味の解明がなされるのだが，とりわけロゴスの概念についての分析は重要な意味を持つので，ここでその解釈を確認しておきたい。

ハイデガーはロゴスを「話 (Rede)」と翻訳し，第一義的に「話として顕わにする (δηλοῦν) すなわち話の内でそれが問題として「話」題になっている事柄を顕わにする」(SZ S. 32) というように規定する。つまりロゴスは「それについて話がなされているところのものを見えしめる (sehen lassen, φαίνεσθαι)」(ibid.) と規定されているのである。これがハイデガーによるロゴスに関しての根本的な規定であり，これを彼はアリストテレスに即して「アポファンシス的な話 (apophantische Rede)」と呼んでいる (SZ S. 32, 34)。ここに言及されている「アポファンシス」とは，ハイデガーによればギリシア語の ἀποφαίνεσθαι すなわち「(そこで話題となっているものそれ自身) から見えしめる」という語の名詞形である。そしてハイデガーは，理解と解釈について規定した後，根源的な解釈の派生態としての陳述 (Aussage) についての考察 (SZ S. 154 f.) の中でこのアポファンシスとしてのロゴスに言及している。そこでは陳述は「伝達し規定するという仕方で明示すること」と定義されることになる。この陳述としてのロゴスの働きが「見えしめる (sehen lassen)」という言い方で比喩的に言われているということは注目に値するのであるが，それについては III で触れる。

さて，上述のようにハイデガーは，陳述をより根源的な解釈の派生態として規定していた。そこで次に，ハイデガーの「理解と解釈 (Verstehen und Auslegung)」(SZ S. 148 f.) についての規定を簡単に見ておこう。

ハイデガーによれば，現存在 (Dasein) すなわち我々人間は，日常的な在り方においては様々な存在者との交渉の中で，それらを「机として (*als*)，扉として，車として，橋として」(SZ S. 149) 見ているのであって，決して自然科学的，客観的な意味

での抽象的な物体としての眼前に存在するもの (das Vorhandene) に出会っているわけではない。ハイデガーが現存在を「世界・内・存在 (In-der-Welt-sein)」と呼ぶときの世界においては，それらは既に何らかの意味をもつもの「として」出会われるわけである。我々が日常生活の中で何らかの物，例えば現在，私が論文を書くために手繰り寄せ，手にしている (Zuhandensein) このペンは，まさに論文を書くための (um zu) もの「として」暗黙の内に，非表明的な仕方で理解されているはずである。それが理解されていなければ，そもそもこの書くという行為自体が成立しえなくなるであろう。ペンに限らず，我々の世界における諸々の存在者との交渉の内には，たとえ非表明的な仕方であるにせよ，いやむしろその交渉が円滑に遂行されるためには常に，既に非表明的な仕方で，あるもの「として」という理解が存している，と言うことができる。これがハイデガーの言う，道具的なもの (das Zuhandene) と我々との交渉の在り方である。しかしこの道具存在との交渉の内に常に，既に存している理解に関して，表明的にその理解されたものの「何として」ということを際立たせることができる (SZ S. 149)。この「何として」が際立たせられること，これをハイデガーは解釈と名付けるのである。ハイデガーが「この「として」は理解されたものの表明性という構造を成しており，解釈を構成している」(ibid.) と言い，また「理解を形成仕上げることを我々は解釈と名付ける」(SZ S. 148) と言うのは，このような事柄を指しているのである。一方，理解においてあるものがあるものとして理解されるという場合，その理解されたものが何であるかということの理解可能性も上の「何として」の内に存している。したがって，この表明化される以前の「何として」ということこそまさに，「意味とは，あるものの理解可能性が保持されているところのものである」(SZ S. 151) と言われるときの「意味 (Sinn)」に他ならない。そしてこの理解の内にハイデガーの言う「存在理解」が根を張っているのである。

以上から，解釈とは現存在に根源的な非表明的理解から「何として」という意味を取り出し，表明化することである，というハイデガーの規定が導かれた。そして陳述は解釈の派生態として規定されていた。したがって，陳述の規定はこの解釈の規定により，「現存在に根源的な非表明的理解から「何として」という意味を，伝達し規定するという仕方で，表明化し，明示すること」ということになる。そして陳述が言葉を用いた「話」の内にもたらされざるをえないのは，論を俟たない。とすれば，ここで獲得された，理解の内に非表明的な形で存している「意味」を解釈しつつ明示化

すること，これこそがハイデガーが言う意味での「話」の内で，すなわちロゴスにおいて行なわれていることであろう。

こうしてロゴスの規定が得られるわけだが，このロゴスの規定は我々を，ハイデガーの思惟の内での真理概念の考察へと導いていく。ハイデガーは『存在と時間』の第44節において，「知性あるいは認識と事物あるいは対象との一致」という伝統的な真理概念について，「真理の「所在」は陳述（判断）である」というテーゼから出発し，「陳述が真であるとは，その陳述が存在者をそのもの自身において発見することを意味している。陳述は言い表わし，陳述は明示する，つまり陳述は存在者をそのものの被発見性において「見えしめる（アポファンシス）」。陳述の真であること（真理）は，発見しつつあることとして理解されねばならない」(SZ S. 214) と規定している。そして，この「発見しつつあることとしての真であること（真理）」は，存在論的には，「世界・内・存在に基づいてのみ可能」(ibid.) であるとして，現存在の根本体制としての世界・内・存在こそが真理の根源的現象の基礎である，というのである。

しかしハイデガーは，以上のように伝統的な真理概念に，世界・内・存在という存在論的な基礎を与えるだけに留まらない。さらに「真理（Wahrheit)」という事柄をギリシア語の語源である「アレーテイア（ἀλήθεια)」の直訳である「不覆蔵性（Unverborgenheit)」と解釈し直す。つまり，先の存在者そのものの被発見性といわれていたことは，まさにこの不覆蔵性のことなのだ，というわけである (SZ S. 219 f.)。このようにして，（陳述としての）ロゴスは，不覆蔵性としての真理（アレーテイア）と結び付けられるのである。

さて，我々がここで注目せねばならないのは，『存在と時間』の時期におけるハイデガーが既に，ロゴスを真理との連関において，すなわち存在者そのものの被発見性のもとで考えていたということである。このことは冒頭に掲げられた存在と言葉についての命題の一つの解釈の可能性を示唆している。つまり（陳述としての）ロゴスにおいては存在者が存在者として発見され，開示される。存在者はロゴスすなわち言葉の内に，現存在によって発見されてある，したがってその意味において「言葉は存在の家である」と言うことができるのである。

しかし我々は，この解釈に納得し，この命題の意味するところを理解しえたということができるかといえば，それは明らかに否である。言葉と存在についてのこの命題が『存在と時間』よりもかなり後の時期に属する著作の中に含まれるものであるとい

う事情を差し引いてみても，存在者が陳述の中で発見されてあるということをこの命題の意味するところであると言うことはできない。それは次のような根源的な事情による。

我々は，ハイデガーによって改めて存在の意味への問いが立てられねばならなかった根本的な事情を想起する必要がある。ハイデガーが存在の問いを再び立てねばならないとした根本的な理由は，ギリシア以来の西洋の思惟の伝統を根底において主導してきた形而上学が存在を問題にするにあたって，存在者の存在を探究しはしても，存在そのものについては問いを立てることさえしてこなかった，という存在忘却の事態への批判からであった。だからこそ存在そのものを問いただす存在の問いの必要性が強調されていたのであった。したがって真理についても，問題にされるべきは「存在者の真理」ではなくて「存在の真理」であらねばならないはずである。ところが上記の解釈によって言われているのは，存在者がロゴスにおいて現存在に発見されてある，ということであって，存在そのものがロゴス（言葉）の内に存する，ということではない。この二つの事柄を混同してしまうとハイデガーの思惟は意味を失ってしまう。ここには，決定的な意味での存在と言葉の相即という事態を読み取ることはできず，十全な仕方では解明されないままに留まっている。

II．中期ハイデガーの真理概念

前節において，「話」としての言葉すなわちロゴスの内に存在者が開示されるというハイデガーの思惟が確認された。しかしながら，一体如何なる仕方で存在そのものが開示されるのかという点については未だ明らかにされていなかった。このことはハイデガーの思惟において極めて重要な意味を持つ。そこで我々は，ハイデガーの思惟に定位しつつ，問題とされている事柄の真に言わんとするところを明らかにするため，先ずハイデガーによる真理概念を確認しておこう。

前節で簡単に触れられたように『存在と時間』における真理概念は，伝統的な「真理」を可能にする，より根源的な真理として，存在者が現存在によって発見されてあるという，いわば現存在の不覆蔵性，現存在の世界における存在者の開示性というものとして思惟されていた。この解釈においてさえ既に，ハイデガーは伝統的な形而上学的真理概念に対して，その根拠の究明が等閑にされていることを批判する形になって

いる。そして実際，ハイデガーは形而上学への批判を常に念頭に置いていた。しかしながら，先にも見られたようにこの次元での真理は存在者の真理と言うべきものであって，ハイデガーの根源的な真理概念である存在の真理ではなかった。それが，その独特の思惟の中に現われてくるのは，時期的には中期の思惟に属する『真理の本質について』においてであろう。我々はこの存在の真理にこそ眼差しを向けねばならない。

既述のようにハイデガーは真理（アレーテイア）を真理（Wahrheit）という代わりに不覆蔵性（Unverborgenheit）ということによって翻訳する。ハイデガーによれば，これは言葉通りの翻訳であるだけでなく「陳述の正しさという意味での真理の慣用的概念を存在者の露現されてあること（Entborgenheit）と存在者を露現すること（Entbergung）という未だなお概念的に把握されていないことの内へ，思索し変え，思索し帰すという指令を含んでいる」（VW S. 16）ということである。すなわちここでの「露現されてあること」が，上述の存在者が現存在によって発見されてあること，存在者の真理に他ならない。しかもハイデガーはさらにもう一歩踏み込んで，この不覆蔵性には既にそれに先立って「より自性的なもの」として覆蔵性（Verborgenheit）が守られている，と言う。「覆蔵性は露現性としての真理の方から思惟されるならば，不-露現性（Un-entborgenheit）であり，したがって真理の本質に最も自性的（eigenst）で本来的な非-真理である。……全体としての存在者の覆蔵性，つまり本来的な非-真理は，あれやこれやの存在者の開示されることがどのようなことであれ，それよりも古い」（VW S. 21）と。

ここで言われていることは以下のようなことである。我々が伝統的な形而上学的思惟の内で理解している真理，例えば陳述と事態との一致と定義されるような真理は，実はより根源的には現存在の世界の内にあれやこれやの存在者が顕わになっていること，すなわち露現性という事態を根拠にして初めて可能になるのであるが，これこそまさに真理を不-覆蔵性と言うときに言い当てられる事態に他ならない。つまり露現性と不-覆蔵性は同じことを言っているのであり，したがって露現（Entbergung）と覆蔵（Verbergung），あるいは顕わにすることと隠し匿うこととは互いに相対立する概念と捉えられるであろう。よって真理を露現性として考えるならば，覆蔵性は確かに「非-真理」ということになる。しかしハイデガーは，この真理（アレーテイア）という語の中に λήθη（隠す，匿う）というギリシア語の否定を聴き取る。真理

（アレーテイア）は隠し，匿うことの否定をその本質に持っており，そうして初めて存在者の露現性としての真理たりうる。その意味で，覆蔵性は露現性としての真理に対しては確かに非-真理ではあるが，それは「最も自性的で本来的な」非-真理であると言われるのである。

しかも，露現性が存在者の真理として「この存在者やあの存在者が開示されること」であるのに対して，覆蔵性は「全体としての存在者」の真理であると言われる。この「全体としての存在者」は，我々が日常的な存在者との交渉の中で意味を持つものとして出会われる個々の存在者ではなくて，そうした個々の存在者の持つ意味が全て「無」に帰してしまうような「不安」という根本情態性において初めて出会われる[8]。したがって「全体としての存在者」ということで言われているのは，まさに様様な存在者が全体として存在しているという事態であり，端的な在るということ，すなわち存在そのもののことである。そしてこの存在そのものは，個々の存在者が露現され，現存在の世界に開示されることの可能性の根拠に他ならないのだが，この存在そのものの覆蔵されることが存在者の真理に対して，存在の真理と言われる。「存在者を存在者として露現することは，それ自身において，同時に全体としての存在者を覆蔵することである」（VW S. 25）とハイデガーが言っているのもこのことである。

以上から知られるように，ハイデガーの真理概念には個々の存在者を露現しつつ，存在そのものを覆蔵するという二重の契機が共に本来的な仕方で属している。我々がハイデガーの真理概念について語る場合，露現性と覆蔵性の相即性（Zusammengehörigkeit）という事柄を眼差しの内に捉えねばならない。そしてこの二つの契機は，ハイデガーに即して言えば，西洋の思惟の歴史，形而上学における存在の歴史と重なり合う。というのは前節で見られたように，形而上学的思惟は存在者の存在，すなわちその本質を問うことで様々な存在者の存在を顕わにすることはできても，存在そのものを問うということはなしえなかった，すなわち存在そのものは覆蔵されたままに留まっていたからである。我々はこのような視点を獲得することによって，形而上学的思惟が存在忘却の内に留まってきた事実，そして更にこの点を批判してきたハイデガーの試みがいわば一つの挫折を経験せざるをえなかったという事実の背後にあったものを明らかにすることができるようになるだろう。

III. 存在と言葉 ——比喩としての言葉の構造——

前節においてハイデガーの真理概念について概観した際，真理の露現性と覆蔵性との相即ということが明らかになり，この相即性と形而上学的思惟の歴史との連関が示された。この連関を明確にするために，我々は『真理の本質について』よりも更に後の時期に属する『根拠律』(1957) という著作に定位しながら，ハイデガーの思惟を跡付けていこう。

『根拠律』での中心主題は，当然のことながら「根拠の命題 (der Satz von Grund)」である。ライプニッツによって定式化されたこの著名な命題は「如何なるものも根拠なしに在るのではない (Nihil est sine ratione.)」という形で言われている。しかし，ハイデガーによって取り上げられる以上，この根拠の命題も存在の問いとの連関の内でその特徴が顕わにされる。つまりハイデガーは，根拠の命題の内に次の二重の仕方の相異なる響きを聴き取るのである。第一の響きは通常聴かれるもので「如何なるものも根拠無しに在るのではない (*Nihil* est *sine* ratione.)」すなわち，肯定的形式では「全てのものは根拠をもっている」という響きであり，一方，第二の響きは「如何なるものも根拠無しに在るのではない (Nihil *est* sine *ratione.*)」すなわち，肯定的形式では「如何なる存在者も（存在者として）根拠をもっている」という響きである (SG S. 75)。この二重の響きの各々に即して，根拠の命題は「根拠の命題は存在者の存在について言っている」「存在の言葉 (*Sagen*) である」(SG S. 90) と聴き取られ，また「根拠についての陳述ではなくて……存在者についての陳述である」(SG S. 82) と聴き取られる。要するに，ハイデガーは根拠の命題の中に自らの思惟の根本問題である存在の問いの契機を聴き取っているのである。

そしてさらに重要なことは，根拠の命題の第一の響きの内に存在と根拠との連関が聴き取られるということである。ハイデガーはこの第一の響きから「存在には根拠というようなものが属している。存在は根拠という性格において在り，根拠的に在る」(SG S. 90) ということを聴き取り，その言わんとするところを「存在はそれ自身において基づけつつ在ることとして本質現成する (*Sein west in sich als gründendes.*)」(ibid.) ということだと規定する。このことをハイデガーは端的に「存在と根拠とは相即する (Sein und Grund gehören zusammen.)」と言い，根拠についても「根拠は存

在としての存在と相即するということからその本質を受け取っている」(SG S. 92) と言うのである。ここで顕わとなっているのは，まさに存在と根拠との相即という事態である。

しかしハイデガーは続けて次のように言っている。すなわち「存在は本質において根拠で〈在る〉(〈ist〉)。それ故に，存在は存在を根拠づけるべき更にもう一つの根拠を決してもちえない。したがって根拠は存在から脱け去っている。根拠がこのように存在から脱-離 (Ab-bleiben) しているという意味において，存在は脱-底 (Ab-Grund) で〈在る〉。存在が存在としてそれ自身において基づけつつあるかぎりにおいて，存在それ自身は無根拠に留まっている。〈存在〉は根拠の命題の支配圏内に入ってこなくて，ただ存在者だけが入ってくる」(SG S. 93) と。この言葉から聴き取ることができるのは，存在は根拠であって，しかも脱-底すなわち無根拠である，という事柄であるが，この言葉はどのように理解されるべきであろうか。

ここで我々は前節で顧みられたハイデガーの真理概念を想起しなければならない。そこでハイデガーは存在者の真理と存在の真理とに言及することで，存在者の露現性と存在そのものの覆蔵性との相即，二重性ということを語っていた。この根拠の命題についての考察の中で，それが存在者の命題であり，存在の命題であると言われていることや，根拠と存在の相即と言われていることも，存在の真理について語られていることと同一のことに他ならない。そのように考えて初めて上のハイデガーの言葉も理解されうるようになる。というのは，存在の真理には露現性と覆蔵性ということが言われていたが，存在者の露現は存在そのものが根拠となっており，しかも存在そのものは覆蔵される，すなわち脱去しているという意味で脱-底（無根拠）ということができるからである。その意味で存在そのものに関しては根拠について語りえない，つまり「〈存在〉は根拠の命題の支配圏内に入ってこない」。したがって存在の真理という事柄と根拠の命題において思惟されている事柄とは同一の事柄であるということができるのである。

そしてこの根拠の命題がライプニッツによって「返し与えられるべき根拠の原理 (principium reddendae rationis)」として「大原理 (principium grande)」と名付けられ (SG S. 43, S. 51 f.)，結果的にこの近代以降の西洋形而上学的思惟を支配し導いていくべき地位を担うようになったことも，やはりハイデガーによる真理概念，すなわち存在の真理の二重性との事柄としての同一性を顕わにしている。根拠の原理が支

配的な最高原理として受け取られる近代以降の形而上学的思惟においては，存在者はその支配圏内に入ってはきても，存在そのものは問題にされ，顕わにされるということはなく，覆蔵されたままに留まっているのである[3]。したがって近代以降の形而上学にとっては，それが根拠の原理を拠り所とするかぎり，存在そのものの解明をなすことは根本的に不可能なのであった。これがハイデガーによる形而上学批判の最重要点であったということができるだろう。

さらに次に考えられるべき事柄は『根拠律』の中でまさに譬え話のような形で述べられる事柄である。つまりハイデガーは，思惟はある根本的な意味において聴くことであり，観ることであると言う場合，それは確かに比喩であると述べた後で，しかしこの比喩の意味するところは「単に 感覚的なものの非-感覚的なものの内への 移し運び（μεταφέρειν）としてのみ」（SG S. 87 f.）受け取られるならば，それは西洋の思惟にとって基準決定的であった形而上学の根本的な区別に従うが故に不適切である，と述べている。ここに比喩としての言葉あるいはロゴスと，形而上学との決定的な連関についてのハイデガーの理解の在り方が示されている。さらに続けて，より端的な仕方でハイデガーは「比喩的なものはただ形而上学の内にのみ存する」[4]（SG S. 89）と言っている。

この問題に関して，ハイデガーはこれ以上深くは触れようとしないが，むしろここにこそハイデガーの存在の問いとその批判する西洋形而上学の根本的な本質との連関を解き明かす鍵が存しているのではないかと思われる。つまり，ハイデガーは当初よりロゴスすなわち言葉の働きを「見えしめる」こととして規定していたのであるが，この「見えしめる」働きこそが言葉の内にある比喩としての性格に基づいているのではないかということである。西洋形而上学はそのギリシアにおける発端以来，目に見え，耳に聞こえる感覚的なるものを超えた，非感覚的なるものの世界の存在を想定してきた。そして，この非感覚的なるものの世界の認識こそが真の認識であるとしてきた。しかし，当然のことながら非感覚的なるものの世界は「見る」ことや「聞く」ことができない。その「見る」ことも「聞く」こともできない世界を「見えしめる」ものがロゴスすなわち言葉なのである。したがって，ロゴスは形而上学的思惟の端緒よりその根本原理として働いてきたのである。

では，何故比喩ということが特に言われねばならないのか。その点を比喩の基本構造を規定することによって明らかにしてみよう。

例として「血のような太陽」という比喩表現を「赤い太陽」という通常の表現と比較しながら考えてみよう。この二つの表現が，例えば戦場を照らす夕陽に対して用いられる場合，自ずからそこに聴き取られる事柄は異なってくる。すなわち「血のような太陽」という表現には，単に「赤い太陽」と言われる場合に伝達される意味内容に加えて，「血」という語によって惹起される生死，苦痛，暴力，殺傷等といった意味内容がイメージとして言外に重ねられる。それで聴くものはそれぞれに，この表現として顕わになった言葉と共に，それを超えて顕わにならぬ，言われざる隠された意味を聴き取る。

したがって比喩においては，顕わなるもの（表現）を通して隠れたもの（意味内容）を聴き取ることができる。これが基本的に理解された比喩の機能であると言うことができよう。このことは上の普通，直喩表現と言われる比喩にも，また「太陽の流血」「血を流す太陽」といった隠喩表現にも妥当すると考えられる，比喩の根本構造と言えよう。

しかしさらに言えば，上で通常の，つまり比喩的ではない表現として用いられた「赤い太陽」にしても隠されたものを持たないわけではない。我々が既に比喩としては受け取らない「赤い」や「太陽」という個々の単語にしても，顕わな表現が指示するのは言葉の背後に隠されたものである。しかもその隠されたものは，「赤（い）」という語を考えれば理解できるように言葉を介することなしには顕わにならざるものである。「赤」という言葉なしには，それによって我々が想起する内容を規定し，伝達することはできない。「赤」という顕わな表現によって初めてその背後の顕わならざるものに触れることができる。

要するに，言葉は顕わな表現を通して隠されたものを見えしめるという根本性格を持つものなのである。そしてこの根本性格が，西洋形而上学をその端緒から決定的に規定してきたのである。

さて以上から観取されることは，既に明らかであろう。存在の問いが問われなければならなかった必然性と，形而上学的思惟の根本性格とは一つの事柄の両面であり，それは真理における存在者の露現性と存在そのものの覆蔵性との相即という事柄と重なり合っていた。そして今見られたように，真理の開示される場としての言葉がその比喩としての構造の内に根源的に露現性と覆蔵性との相即という構造を備えていた。すなわちハイデガーが問い求めていた存在の真理と同じ一つの構造を備えているので

ある。我々はこの事柄をどう見るべきであろうか。存在の真理と言葉とが同一の構造を備えているということは何処にその起源を有するのであろうか。

それは何処かといえば，やはり存在の真理が言葉を用いてしか明かされざるをえないこと，学問的に探究される際にもロゴスとしての言葉を介さざるえないという事実である。これこそまさに存在と言葉の相即と言うことができよう。西洋の形而上学的思惟の歴史はその端緒よりロゴスによって規定されてきたのであり，存在と言葉とが相即する以上それは必然的な帰結であると言わざるをえない。存在の問いを思惟する際には，存在と言葉とが相即するという根本事象が我々の前に立ち現われる。したがって存在の問いは問われるべくして問われたのであるが，しかしその内には存在と言葉との相即から生じる根源的な不可能性，すなわち存在は言葉と相即するが故に，言葉による問いにおいては絶えず何処までも脱去し，覆蔵されざるをえないという不可能性が存しているのである。そしてここにこそ，ハイデガーの思惟が一つの挫折を経験したことの根本原因が存していたと考えることができるのではないか，と思われるのである。

結　　語

ハイデガーの存在の問いの道を辿ることで我々は存在と言葉との相即という事象に到達した。この事象こそ「言葉は存在の家である」という命題に決定的な解釈の可能性を与えるものであろう。そして我々はこの事象が同時に存在の問いの不可能性を意味しているということも見た。しかし，このことは既にハイデガーも洞察していたことであった。だからこそ西洋の形而上学が決定的な仕方で基準を与えられる以前，すなわちプラトン，アリストテレス以前における元初的（anfänglich）な存在をパルメニデスやヘラクレイトスの言葉の内に聴き取っているのである。

したがってその思惟の在り方は当然のことながら，通常我々が哲学と呼んでいる形而上学的思惟の在り方とは異なってくる。とすると，果たして存在そのものを聴き取る思惟をこれまでの哲学の用いてきた言葉で言い表わすことができるか，という問題が生じてくる。つまり伝統的な哲学の言葉によってもはや言い表わすことのできない事柄の思惟を，我々はやはり哲学と呼ぶことができるかどうかという問題である。この問題は冒頭に揚げた命題の後に続く「思索するものと詩作するものとはこの住居の

番人である。彼らが見張っていることは，彼らが存在の開示性を彼らが言うことを通して言葉の内にもたらし言葉の内に保存するという点において，存在の開示性を完遂することである」(WM S. 311) という言葉を我々に想起せしめるが，ここに言う「詩作するもの」の言葉が存在を開示するということの妥当性についてはさらなる考察を待たねばならない。

註

* 本文中のハイデガーの著作からの引用には，次の略記号にページ数を併記して示す。

SZ „Sein und Zeit“ 15. Aufl. 1979.

WM „Wegmarken“ 2. Aufl. 1978.

VW „Vom Wesen der Wahrheit“ 6. Aufl. 1976.

SG „Der Satz vom Grund“ 6. Aufl. 1986.

(1) 「相即する (zusammengehören)」ということでは，相異なるものが同じ一つのものを根拠にして，その内において相互に属し合うこと，ということが思惟されている。

(2) vgl. Heidegger, M. „Was ist Metaphysik?“ 11. Aufl. 1975.

(3) この事は近代以前の西洋の思惟の在り方にも妥当する。vgl. SG S. 51f.

(4) ここでは普通「隠喩的なるもの」と訳されるべき „Das Metaphorische“ を「比喩的なるもの」と訳した。これは後述の議論が隠喩のみならず，比喩一般に妥当するものと考えられるためである。

〔哲学　博士課程〕

Die Zusammengehörigkeit von Sein und Sprache

——Anhand Heideggers Denkens——

Yoshitaka YAMAMOTO

Seit *Sein und Zeit* oder früher als das, hat Heidegger immer schon sowohl die Frage nach der Sprache wie auch die Seinsfrage für sein Kardinalproblem gehalten. „Die Sprache ist das Haus des Seins," sagt Heidegger. Dieser bekannte Satz deutet uns den wesentlichen Zusammenhang zwischen den beiden Sachen an.

Wie, dann, kann man den eigentlichen Sinn, den der Satz besagt, recht verstehen und den Zusammenhang, der zwischen Sein und Sprache waltet, erklären? In welchen Sinnen kann man sagen, daß das Sein und die Sprache zusammengehören? In diesem Aufsatz handelt es sich um die verborgene Zusammengehörigkeit von den beiden Sachen, um den oben erwähnten Fragen zu antworten. Bei der Erklärung müssen wir Heideggers Begriff von „logos" d.h. von der „Rede" betrachten, denn er sagt, daβ der logos etwas (das Seiende) sehen lasse. Und wir müssen auch seinen Wahrheitsbegriff bewahren. Denn die Wahrheit ist der Ring, der das Sein und die Sprache zusammenbindet. Sozusagen haben die Wahrheit des Seins und die Sprache als die Metapher dieselbe Struktur. Der Kern der Struktur ist die Zusammangehörigkeit von dem Entborgenen und dem Verborgenen, oder von der Entbergung und der Verbergung.

Wir werden die grundsätzliche Unmöglichkeit von der Seinsfrage in der mannigfaltigen Zusammengehörigkeit finden. Und die Unmögligkeit ist der Grund von der Seinsvergessenheit der abendländischen Metaphysik.